

二〇二四年(令和六年)十一月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇一卷第十一号

村野次郎創刊

香蘭



2024年(令和6年)11月号

創刊100周年 全国大会記、記念祝賀会記 特集

第101卷

第11号

通巻1127号



香蘭

2024年(令和6年)11月号

創刊100周年 全国大会記、記念祝賀会記 特集
第101巻 第11号 通巻1127号

目次

七首抄(九月号)	緑地帯	城・後藤(彌)・原(礼)	伊藤美恵子	渡辺礼比子
明宝研究会第一五五回	八月例会	田村(久)・大里・新井(秀)	奥田(富)	表二
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向	桜井京子・石井雅子	静子	加藤英彦	
令和七年新年歌会	参加申込書、詠草記入用紙	和子	2	
歌会及び会合・会員消息・他		子		
編集後記・新宿日記		子		
令和七年新年歌会のご案内		子		
全国大会記念集合写真		子		
蓬春「桃」		子		

村野次郎作品 私の愛誦歌(111)
招待作品(奇数月連載)⑦ 天の星くず
作品

推薦香蘭集

二
三

一貢公論(42)	十首選(九月号)	丸山三枝子選	中村陽子
作品一	作品二・三十首選(九月号)	渡辺礼比子選	千々和
村野次郎への旅(175)	村野次郎(175)	昭和期の香蘭(十)	鈴木桂久
香蘭とともに(13)	香蘭(11)	香蘭(十)	幸子
続・醉風船	インテリゲンチア	連載から学んだこと	幸子
特集「香蘭」創刊一〇〇周年記念	全国大会記	千々和	
エッセイ・自由研究	34	久	
作品評(九月号)	記念祝賀会記	幸子	
音を感じる歌	高岩	美	
作品一	市川	美	
作品二	畠井	美	
作品三	畠井	明	

香蘭集

目次・緑地帯カット
和田表
雄表
三 110 108 103 101 98 88 83 82 80 78 76 74 72 70 46 31 30 20 18 16 15 66 65 59 24 4

渡辺礼比子

村野次郎作品 私の愛誦歌 (III)

孟蘭盆に索麺の折持ち來り

かつての僕つつましくあり

腰が低く、寡黙な年配の男の姿が目に浮かぶ。
「僕」という語は、現代ならば「上から目線」
などと非難されかねない表現であるが、この歌
が発表されたのは昭和十年。「法の下の平等」と
いう概念のなかつた時代背景を考慮して鑑賞す
べき一首といえよう。

作者の生家である府中の村野商店では、この
時代なりの秩序の中、主従の良好な関係が保
たれていたと想像される。だからこそ、この元
従業員は、今なお旧主に恩義を感じ、益暮れの
挨拶を欠かさなかつたのであろう。

一首は、次郎が盆の里帰りの折に目にした場
面。既に上京し、銀座で輸入販売の仕事に携わつ
ていた彼は、日頃は都会生活者でありモダンな
感覚の持ち主だったはずだが、ここでは傍観者
の視点で、二人の男のやりとりを好ましく、ま
た、懐かしいものとして、しみじみと眺めてい
る。

『櫻風集』

天の星くず

あれは三月の沫雪あわゆきいやわかき菜にまぶしたる塩のかがやき
海わけて進むドローン半島のふかき頸部らんじょうの藍青に消ゆ
食卓のグラスに沈むさみどりの夏のしづくのセロリ一茎
薄明の岸をはなれて放たれし弾頭あわき水脈みおを曳きゆく
花降る日を待ちてまどろむ丘のごと高菜しらすのチャーハンの光り
あの巨き腹に呑みたる一撃に炎えながら没おつあおき船尾は
微笑んで死はおとずれむやがて沖を今日をかぎりの落暉がそめる
網の上に焙やかれる一尾ふつふつと妬みのような脂したたる
抱きよせたくて駆けゆく若き胸あれも幼き恋といわむか
左腕やら腿やら脛に星くずのように降りつむ蚤の赤斑ふ

◇ 招待作品 ◇ 奇数月連載⑦

わたしのなかにも小さな虫が棲んでいるだろ。差別の虫がうごきだすと決まってだれかがこころを傷める。この虫はときに正義の貌をしていたりするので、自らの加虐性に気づいていないことが多い。被害者が声をあげて初めて気づかされるのだ。

粗っぽく言えば、ハラスメントとは「相手に対しても不快な状況を引き起こす言動」である。セクハラ、パワハラ、マタハラ、モラハラ、アカハラなどその類型はじつに多様だ。多くは上位の優越的地位から繰り出される品性悍ましい威圧力を伴っている。

先日、日本ベンクラブの女性作家委員会が「性加害のない世界を目指して」という宣言文を発出した。賛同団体には日本ベンクラブの他、日本文藝家協会や日本劇作家協会、日本出版労働組合連合会や「すばる」「月刊新潮」の編集部など十数団体が名を連ねる。現代歌人協会もそこに賛同した。

性加害とは同意のない性に関する加害行為全般を指すが、その多くは密室化した空間で行われるために証明するのが難しい。しかし、性加害は単なるハラスメントの範疇を超えた卑劣な暴力である。いずれも人権への侵害で

あり、人間の尊厳への冒瀆である。

被害者はどこに相談しているのか。一昨年にNHKが実施した性暴力実態調査アンケートによれば、性暴力の専門家やワンストップ支援センターは2.3%、医療機関は2.2%、弁護士や法の専門家は0.9%、警察は10%であるという。三万八千件以上の回答を集計した結果だが、この数値を単純に合計しても全体の15%程度しか相談していないことになる。実際に重複回答もかなりあるはずなので、相談比率はさらに小さいだろう。相談するほど深刻な事例が少ないのではないか。これは明らかに相談しづらさの結果とみるべきだ。

被害者の多くは口惜しさや恥かしさに耐えながら、知られたくない屈辱的な体験として記憶の奥底に蓋をする。軽い冗談のつもりだったとか、合意があつたはずなどの口吻は加害者側の常套手段だ。今後、相談窓口の充実や横断的なシステムの構築が望まれるが、それらを待てない昨日や今日の被害者はだれが救済するのか。せめてあなたは一人ではない、いつも私たちはあなたの傍にいると伝えることはできないか。そうした文化を生活のなかに根づかせることはできないか。

四選者 の 作品

百 日 紅

平 塚

千々和 久 幸

屁糞葛

東京 桜井京子

スカイツリーに恋したという歌はないただ立っている木偶坊
朝刊を読み終えれば疲れたり今日一日が終わつた気のして
本日の歩数は八百十六歩 「危険な夏」はおろおろ歩き
忙しく駅前を行く人の群れ今日にも戦の始まる気のす

同じバスに乗つてましたか降りるときは一緒でしたねえさよならまた
森が見えチャペルが見えて黄昏の底に沈みゆく古き町
ぼつとりと花首おもき百日紅なにか言わんと風を待ちおり

妻よりは連れ死を待つわが頭上蟬はいつまでも鳴き止まぬなり

仏 法 僧

我孫子 丸 山 三枝子

わたしたち明るい内から酌み交わし大井田さんなら罰当たりと言う
男前豆腐店なる「ケンチヤン」は絶品にして酒宴だけなわ
どこまでもエンスが続き終はりなき夏と思ひぬ昼がほの径
帰省する真夏のハイウェイ沿道に夾竹桃は揺れやまぬなり
位負けするなど定家葛言ひ恐れ入りたり屁糞葛は
なんだかなあ時代遅れになつたのか木陰に塵取り立て掛けた
裏庭にいくつも穴を残しては蟬たちどれもここに戻らず
スサノオは郷里の神楽のヒーローぞ八岐大蛇の首を落とせり
夏椿咲いてゐたるを見て過ぎて友だちは少なくていいのだ
バージョンアップした後さまつてどことなく機嫌が悪いノートパソコン
横浜 渡辺 札比子

風に乗り木遣り聞こえ来この丘の麓の町の夏祭り今日

失せ物をわが探すたび「置き場所を決めて戻せ」と夫飽かず言う
そのかみの軍港なりし隣町花街の名残の一軒消えぬ

暑き日のプラットホームを歩く鳩おまえも老いづく歩みならんか
杉の樹の天辺にいる仏法僧つくづくつまらなそうに鳴くなり
幸いは山のあなたに住むならず変わり果てたるふるさと遠し
ふるさとの同じ道にて迷う夢ながく見ないが道もあらなくに
青空に立つ太郎雲 いつだつて迷いつづけて今日まで來たる
倒れいしことのみ告げて警察は〈個人情報〉とぞ口噤む

一頁公論

(42)

「積もった雪」

上の雪

さむからな。

つめたい月がさしていて。

下の雪

重からな。

何百人ものせていて。

中の雪

さみしかるな。

空も地面もみえないで。

この雪は、金子みすゞの心が観た雪、心が

感じた雪なのだろう。特に「中の雪さみしか

らな」にみすゞの優しさとさみしい心を感じ

る。

見えないものを心の眼で観ようとすることは

短歌にも絵画にも通じる。

私の今の絵画の師の川合明郎先生も観ることの大切さをいつも説いている。

先生は現代における神話のような詩的な世

界を描く新進気鋭の画家で、その絵には海・

星・洞窟などがよく描かれている。

どこか神秘的で静かで深い何かを感じさせ

る世界觀が素敵だ。

先生は、何をどう観て生きているかが作品

に現れると話す。

その制作は下塗りをして画面を眺め、観えてくるものを描くことから始まる。描きながら2~3年画面を眺めていることもあるという。長い時間眺めていると心理状態も様々変わり、観えてくるものも変わってくるのだそうだ。

じつと観るということは、自分の内面を見つめることになるのだろう。

先生は、固定概念にとらわれないで作品を見

『俯瞰する目』を意識することが大切だと説く。

普段の教室でも私がモチーフをいきなり描

きたさうとする時、集中して黙々と描いていく。

おつしやる。そうすると必ず何か発見がある。

俯瞰して観ることの大切さを感じる。

これは、短歌を詠む時にも言えることだろ

う。一つのことを色々な視点からよく見て感

じて短歌を詠みたいと思うが、いつも何かに

追われているような毎日なので、もう少し余裕を持てるように心掛けたい。

幼い頃私は無口で大人しく、三人集まると話しができないような子どもだった。

一人遊びが好きで、頭の中で色々空想した

り、物語りを作つて楽しんでいた。現実より

も空想の世界にいたような気がする。

頭の中では様々なことを考えていても話さないので、何を考えているのか分からぬようないいな子どものだつたと思う。

人は誰でも常に色々なことを考えたり想像

したりしているが、その心の宇宙は誰しもが異なる。

「心の宇宙」をスマホで検索してみたら、金

子みすゞが表示された。

金子みすゞは、頭の中で色々な空想を膨ら

ませて詩を作つていたような感じがして、ど

こか親近感があり好きだ。

たとえば、こんな詩がある。

作品一 十首選



(九月号作品から)

丸山三枝子 選

・フライングばかりして来し半生か「見るべきほどの事」いまだ見
ず

「フライング」は広辞苑で「競争などの際、スタートの合図以前に飛び出すこと」とある。生來のせつかちな質なのか、或いは他人にはそう見えていないのに、作者自身がそう思いこんでいるのかも知れない。軽妙に詠まれた上句からは自省の思いが窺える。この上句を受ける下句の、「見るべきほどの事は見つ」は平家物語の壇ノ浦の合戦での、平知盛（享年34歳）の辞世の台詞だ。この台詞を振つて詠まれたパロディーの歌である。まだまだ見残した事がある、との、とても前向きにして謙虚な作者が懐ばれる。

朝香ふさ枝

・出向きたるパリは何もが素的だとう孫の土産はエコバッグなり

このお孫さんはバイオリニストなのだが、一読クヌッとさせられる。作者の日常を知悉しているが故の「土産」と読んだが、作者の好みに相応しい普段使いの「エコバッグ」が想像される。パリならではの他の土産もあったかも知れないが、そんな中から作者の心に先づ触れたのは毎日使う「エコバッグ」であった。今使っているエコバッグは少し草臥れてきていたかも知れない。お孫さんの濃やか

な心遣いと、それをよろこぶ作者が見えるようである。
・ひとすぢに煙草の匂ひ流れて父か夫か庭にきてゐる

石井 雅子

作者の庭に近いどこかで煙草を吸つている人がいたのだろう。匂いに敏感な作者が思われる。亡くなつた「父」も「夫」も愛煙家であつたことも分かる。この前に置かれた歌は、ぐちなしの香りなかしくちなしをジャスマインと言ひ植ゑくれし父で、亡き人の庭の象徴としては、季節の樹木や草花はよく詠まれるが、「煙草の匂ひ」はユニークだ。「煙」は、昭和の頃の煙突のけむりや煮炊きのけむりなど、人間への郷愁を感じさせる。

・批判多き「朝日」なれどもこの題字（ミモザの黄色）は粹な計らひ

市川 義和

「ミモザの題字」のタイトルで、巻頭の歌は、〈朝刊〉の題字はミモザの黄色なり朝日新聞三月八日である。新聞の題字に注目した歌はあまり見かけない。こんなところに編集者像が窺えて立ち止まつた。三月八日の朝日新聞の題字は、鮮やかな黄色の小さなミモザの花に囲まれた〈朝日新聞〉であった。朝日新聞への批判が多かつた時期が思われ、それにも増して鮮やかな「ミモザの黄色」に、朝の作者の眼が奪われた瞬間が見えてくる。下句のフレーズも粹な計らい、と読んだ。

・遅刻欠勤なき桃太郎タガたの散歩に出ればかならず出会う

伊藤美恵子

「桃太郎」は、コンテナを運ぶ機関車の名前らしいが、作者の最寄り駅の時刻表には記されていないと言う。だが桃太郎は、「遅刻欠

勤」などは無く正確に働いているようだ。面白いのは、作者の夕がたの散歩も決まった時刻でそのコースも同じということだ。桃太郎は、散歩のたびに「出会い系」作者の友だちのよくな存在なのだろう。ここでは、何か特別のことを言おうとしていない風情がいいなあとと思う。結句の「かならず出会い系」の、力の入れよう心地よいユーモアが滲む。

・庭近き電柱に啼くみんみんよ紫陽花に残る殻はお前か

大井田 啓子

今、まだ盛んにみんみん蟬が鳴いている。作者の庭の紫陽花にそこの蟬殻がそつくり残っていたのだろう。近くの電柱にミーンミンミンミンミーンと力づよく鳴いてるのは、作者の庭で孵化した蟬に違いない、と思いたくような下旬のフレーズだ。力づよく鳴きつづける蟬への愛おしさも作者にはあるに違いない。わが庭で孵化したみんみん蟬よ、おまえも一人前になつたなあ、と。

岡野 甫江

全体にシンプルに詠まれた歌の心地よさ、とでも言おうか。むらさきの花菖蒲が今日も咲いているなあ、と言つてはいるだけの歌だが、言葉が刈り込まれているからむらさきの菖蒲が際立つ。雨に濡れて光ついていた昨日の菖蒲と、太陽の光に照らされて光つて今日の菖蒲のむらさきには、それぞれの異なる趣があるのだろう。極端かも知れないが、ここからは無為自然という人生が見えてくる気がする。自然や自在さに対する憧れの如きものが見えてくる気がする。

・玄関の真上はつばめ一家住み人ら今年も裏より出入り

斎藤 優子

「つばめ」は毎年春先に渡来して、秋頃まで暮らしへ戻つて行く。つばめの季節になると思うことだが、道を間違えずに来て、ちゃんと帰つて行くものだと感心する。ここでの「玄関の真上」の住処は、昨年戻つて行つた燕かも知れないと思う。作者一家は今年も来た「つばめ一家」に玄関を占拠されて裏口から出入りする。燕一家は、そんな作者一家の親戚のような存在になつてゐるようだ。作者は毎年燕が来るのを待つてゐるのかも知れない。結句は字余りになつても「出入りす」と、「す」を足せば落ち着くか。

・耳もとで（春はあけぼのいとエモし）娘がくり返す笑ひながらに

鈴木 桂子

清少納言の隨筆『枕草子』の冒頭の「春はあけぼの」と、最後の「いとをかし」をそのまま持つてきて、「をかし」ならぬ「エモし」と、あざけて言つてはいる才氣活発な娘さんが思われる。「エモい」とは、今流行の俗語で（心が搔きあぶられて何とも言えない懐かしい気持ちになる）というほどの意味らしい。平安中期の古典の言葉と、現代の流行語の取り合はせが絶妙で読ませる一首である。

・花好きが代名詞となり折々に花をいたたく花のない我は

谷本 朝江

淡々と詠まれた四句切れの歌の結句で、可笑しくも寂しく立ち上がりつた。長い施設暮らしの日々からの素材。花が嫌いな人はいらないだろうが、殊にも「花好き」の作者なのだ。「代名詞」だから、名指しではなく、「あの花好きの人」などと呼ばれているのかも知れない。結句の「花」は、「華」の字が適切だろう。

作品一、三 十首選



(九月号作品から)

渡辺 礼比子 選

として鑑賞することもできる。下句には作者の倦怠感、寂寥感がうかがえ、上句の簡素な美の世界と、実によく照応している。表現に抑制が効いており、余情深い一首である。

・困つたら頼りになるはユーチューブ今日は網戸の張り方習う

竹本 幸子

(作品二)

・母恋の歌に出会うと立ちすくむ私は醒めた娘でゴメン

小 笹岐美子

短歌の世界において母をテーマにした歌といえば、近代短歌の多くの名作の流れを引いて、子の母への思慕が普遍的なものとして歌われている場合が多い。しかしながら、例えば、母原病、アダルトチルドレンなどという語に象徴されるように、現代の母子関係は、様々な複雑な問題を孕んでいる。また超高齢社会となつた今、介護の問題は誰にとっても重い課題である。そうであつてみれば、短歌の世界でも、もつと現代の本質に迫る歌が詠まれていいくのではない。この歌は「私は醒めた娘でゴメン」と軽やかに詠んでいるが、創作における固定観念を打ち碎こうとする意欲のある歌と読んだ。

・風立ちて紫陽花が露をこぼしたり何もなさざる一日^{ひのひ}が暮れる

杉山伊都子

今夏の猛暑の日々にあつては、誰だつて何をする気もおこらなかつただろう。そんなこの夏の一齣を描写した歌と読むこともできるが、しかし、作者の内面世界をのぞかせる、もう少し奥行きのある作品

今やユーチューブは見たいときに見たいことを、知りたい時に知りたいことを何でも教えてくれるオールラウンダーである。筆者も料理、掃除、害虫駆除など、日常的にネットの記事やユーチューブのお世話になつていている。なるほど網戸の張り方などは、ただ文字で読んだだけでは分からぬことも、動画で見せられることでその理解度は深まる。「一、二句のとほけたもの言いが効いている。

・西瓜にはすいかの香り「スイカだね」視力おぼろな母が口にす

能城 春美

高齢の母の世話をしている。視力の「おぼろ」な母は匂いでそれと察して、確かめるように、あるいは季節の果物を味わえる喜びを噛みしめるように「スイカだね」と言つた。作者は、その衰えを案じながらも、母が西瓜を口にしたことを見んでいる。切ない介護の歌である。

・売り物の柚子の木に住み順調に成長しておりアゲハの幼虫

三澤 幸子

作者は店先で売っている柚子の木についている、アゲハの幼虫を見た。「順調に」というのだから、通りがかりに何度も見ることがあつたのだろう。蝶となつて飛び立つ迄、丁度いい居場所を見つけた揚羽には、木が売物かどうかなどには関心がない。成長していく

蝶の姿を見守る作者の目の濃やかさがこの歌の魅力であり、こんなところでも自然観察ができるという、ささやかな発見の歌もある。・信号を待てる車窓に熟れ麦の香をはこびくる一瞬の風

安田 恵子

作者は乗物に乗っている。家の近くなのか、それともどこか遠くへ旅に出かけたのかは分からぬが、信号の一時停止を待つ間、熟れた麦の香りのする風を嗅いだ。それは何となつかしく、慕わしい香りであったことだろう。そんな一瞬を捉えることの大切さを教えてくれる一首。ただし運転中の作歌には呉呉もご注意を。

（作品三）
・アスファルトの道渡りゆく蝸牛われの勝手で草に戻しぬ

内海 恭子

蝸牛ののろのろした進みぶりを見て、これは危ない、轢かれではいけないと草に戻したのは自分の一人よがりだったかもしれないと作者は反省している。人はよかれと思って他者に対して様々なおせつかいをするのだ。しかし作者は、そこに気づくことのできる柔軟な精神の持ち主であるともいえる。結句には文語の助動詞「ぬ」を使っているから、文語口語混用歌といつていいだろう。口語表現の「われの勝手で」によって歌が立ち上がった。

・叩いたり撫でたりさすったり眺めたりもうすぐ出番だ一番西瓜

柏原 貞雄

農業のプロフェッショナルの歌である。両手で抱えるほどの大きなスイカ、ものによつては人間の頭ほどの大きさもあるだろう。そ

れを、叩いて、なでて、さすつて、愛しみながら育てていることをこの歌から知った。台風や猛暑から守り、大きなおいしいスイカを育てる迄には、さぞ手がかかることだろう。西瓜を擬人化して作者の言う「もうすぐ出番だ一番西瓜」から、わが子に対するような愛情を抱きながら、西瓜が作られていることを改めて教えられた。

・戦場の片付けしつ込み上ぐる涙に夢より目覚むる朝

菊地 萩子

日頃から時事に关心の高い作者である。年齢から考えれば、この「戦場の片付け」は自身の体験からた言葉ではなく、日々テレビで放映されている、ロシア・ウクライナの、或いは、イスラエル・パレスチナ等で起こっている戦争の惨状に常に胸を傷めているからこそその夢想ではないだろうか。「こみあぐる涙」にこの作者の繊細な人間性が窺われる。テレビで見る現地の状況を深く心に留めている感性が貴重なものと思われた。

・六時半妻が野菜を切る音す いつまで続く今日で五十年

小城 勝相

「今日で五十年」ということは、この日めでたく、金婚式を迎えたのだろう。一首からまるで主婦の鑑のような妻の姿が目に浮かぶ。作者はその音を今日はひとときわ心地よく聞きつつ、これが自分にとっての五十年の幸せだったのだと詠嘆している。

しかしこの一首の眼目は四句の「いつまで続く」であろう。こうした記念日だからこそあらためて、この幸せが永遠ではないという想念が作者のなかに芽生えたのだ。作者が愛別離苦に思いをいたしていると感じるのは深読みであろうか。

昭和期の「香蘭」（十）

千々和 久 幸

「香蘭」第五卷第六號は昭和二年（1927年）六月一日に発行された。表紙畫裏書及題字は引き続き北原白秋。頁は總數六十頁であつた。

例によつて目次から見て行こう。巻頭の短歌欄は十三名が出詠、掲載順に村野次郎、筏井嘉一、今井嘉雄、橋本政一、本間樂寛、南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、楠谷伸、石野正太郎、橋本敏夫、酒井廣治、杉浦翠子である。次いで村野次郎のエッセイ「愛しき歌人の群」に現はれたる短歌に就いて、第二短歌欄の出詠者は以下の九名で、成田憲三、眞島勝郎、松丸遜一郎、西村孝、住吉良康、日根まもる、若林昇、久米蒼月、神谷葛三、さらに前月歌壇合評（杉浦翠子、冬野木枯、深野庫之介、橋本敏夫、水無月集に今福公一、大貫迪子など十八名、香蘭合評會（次郎、翠子、樂寛、松若丸、達夫）、橋本政一の前月女

⑥浄水池の汽笛なりにけり曇りたる青葉にひ
びきこころゆるがす（露草して）

先生の作品は毎月六首のマイ・ベースである。どうみても寡作である。だが同欄の筏井嘉一は「自畫像」十二首、本間樂寛「信濃路」

河集（酒井廣治選）に十七名、青嵐集（村野次郎選）に二十八名、六號雜記（翠子・敏夫・

則夫・良康）、歌會記事、編輯後記（政一・樂寛・次郎）、となつてゐる。

さて巻頭の村野次郎の歌から見て行こう。
さて先生の作品をざつと見ておこう。①の

歌、タイトルは「旅」となつてゐるが、これは弔問を兼ねた旅であつたとみえる。「うつそ

み」はこの世に現存する人間で、先生自らの

こと。死者は冷たい墓の下に眠つてゐるが、生きて弔う間は汗を流し塵埃を浴びて、東

奔西走の趣である。毎度書くが、壯年期の先生は忙しかつたのである。

②の歌、苜蓿はシロツメグサの俗称。その上に座し、靴を脱いで涼を取つたというのだが、忙しくも長閑な旅ではある。頭上には未だ初夏の日射しが残つていたのだろう。

③墓のべにしみいる夕日あかるくてひとり歩
を歸り來にけり
④はづかなる草さへ染む夕づく日うする道
むに粗き土くれ
⑤水のべを提灯つけて人來れり旅の淺夜のこ
ころしたしさ

③の歌、同じ場面だが時の経過を織り込んで、すでに夕日が射してきたと詠う。先生は粗い土の塊の上を歩いている。そろそろ帰り支度をして、ということだろう。

④の歌、「はづか」は手元の辞書にはないが、「はつか」なら「僅か」とある。ここでは「僅かなる」であろう。ついでに「染む夕づく日」も悩ましい。本来なら「染むる」ということになる。往時の「香蘭」人は文法には無頓着、よく言えば大らか悪く言えば無神経だったということになろう。

⑤の歌、いきなり「水のべ」や「提灯」が出てくるから戸惑うが、これが当時の地方の生活環境、旅情の景物として読んでおこう。一連は久々の旅で、先生の寛いで柔らかな息遣いが聞こえていずれの歌も親しみやすい。

⑥の歌、「歸京して」とあるから旅とは別途に発想されたもの。淨水池はこの頃から村野邸の近くにあつたのだ。それにしても六首では勿体ない。十首あればもっと旅情に厚みが出たろうにと、勝手なことを思つたりした。

次いで前月歌壇合評を読み、「香蘭」人の心意気

に拍手を送っている。さても現在の「香蘭」人にかかる情熱と批判精神ありや、と。

アララギ

岡 龍

自堕落の身持づけてわが家をいではすれども猶しも惑ふ
むわが子おもほゆ

(翠子)不孝者の子を歌つた歌は珍らしい。雪の降る晩に行方不明になつた子を案じるといふ俳句を古人に見た覚えがある。が、短歌では兎角孝行息子や良妻ばかりを扱つたのが多いので却つて人情の鋭さに觸れさせて呉れない。感情の試練は曲折波瀾に據らなければ生きれない。戀は人を無慾にし、失戀は人を奮起させるやうなものだ。かういふ題材をもたれる岡さんを勵ましてあげたい。

(二)のお歌の「掛人にて身をせばめ」簡単の詞の中にも要領を得てゐると思ふ。少女の頃私が兄の家に来てゐるとき、生家の祖母からの手紙の中に、「廣い邸にあながら、父母のなきそのもと肩身狭く暮らし居り候はん」などあつたが、「肩身狭く」が「身をせばめ」に變化すると、立派な歌語になる。國語はかういふところにどこまでも苦勞しがひがある。

(木枯)こうした歌を讀むと、何より、老境にある岡氏の寂しさに同情させられて、歌としては、二首共に油氣が少なく、さして苦刻の跡も見えない、氏としても自信を持つてゐる様ではあるまい。どちらかといへば、(二)の方がや、しんみりしてゐるから採れる。(二)は説明が勝つてゐて矢張りこれだけの歌に過ぎない。

(一)は(一)より事件が明瞭になつてゐる。「自堕落の身持づけて」我子を蔑んでゐる親心。それがあの滋味に富んでゐられる岡さんの發意だけに餘計に同情が出来る。しかし、「いではすれども」はどうでせう。結句に「猶しも惑ふ」といふ立派な据え方があるので、こゝで、殊更に奥みのある詞を織り込み必要がないやうに思ふ。「いではすれども」の言葉は、ことばが既に身振りを現はしてゐる言葉で、私は厭だと思ふ。しかしこれは先輩の岡さんに対する私の質問があるので、批評とは思つて下さるな。兎に角おきまり歌の多い今日こんなにいろいろのことを言はしめる程のお歌に逢はして下すつたことを謝す。これは連作なんでせう。みんな批評をしたら面白いこと、思ふ。

香蘭

結社・歌誌・歌人動向「うたの場」

「短歌」2024年9月号

- ◆代表 千々和久幸 ◆発行人 中村富美子 ◆形態 結社
- ◆創刊 大正12年村野次郎 ◆師系 北原白秋 ◆刊行頻度 月刊
- ◆住所 〒160-0023東京都新宿区西新宿1-21明宝ビル内
- ◆TEL 03-3342-5013 ◆HP <https://www.kohran.net/>

代表歌10首

〈新しい朝〉とぞ唱う、人生の終わりに一步近づく朝だ

丸山三枝子

葉桜になる頃までにと思ひしが花の終はりはしづかな桜

桜井 京子

衰えし母が正氣に戻るときありて「みんなをよろしくね」と
いう

渡辺礼比子

平安朝にしばし遊んで日が暮れて令和の厨にもやしを炒む

高畠 慶子

蜜柑ひとつ我に放りし二十歳放物線の先は永遠

中村かよ子

喪服着て過ごし日々の過ぎゆきぬ遠くに白くけぶる山茶花

江口 紗代

階段も風呂にもトイレにも手すりつけ忙しくなる右手左手

飯島智恵子

学生の気分に戻れる束の間をバラソルくるりと回し別れぬ

石井 雅子

生前のむすめが亡夫に供えたるジョニ黒あけて三人で飲む

伊藤美恵子

狂わざる時計というも何がなし疎ましきもの用なき身には

千々和久幸

世界でもつともエキサイティングで

チャーミングな歌誌

千々和久幸

招き挙行することが出来た。（於東京ガーデンパレス）

I、「香蘭」の小歴と近況

二〇〇一（平成十三）年十月に「香蘭」代表に就任した時、わたしは、「香蘭」を「世界でもつともエキサイティングでチャーミングな歌誌にする」と宣言した。（いま、青春を呼び戻そう）所収）

当時、熊本県山鹿市で酒と温泉に浸り、憧れの醉生夢死の日々を満喫していたわたしは、お世話になりっぱなしの「香蘭」にせめてもの恩返しをと、押っ取り刀で上京（！）したのだった。だがこの決断が「香蘭」並びにわが人生にとつてハッピーだったかどうか、いまのところ曰く言い難いである。

「香蘭」は大正十二（一九三三）年三月に、北原白秋の高弟であつた村野次郎が白秋を顧問に創刊号を発行し、令和五年三月にめでたく一〇〇周年に達した。村野次郎の後は星野丑三が引き継ぎ、現在の代表千々和久幸は三代目である。（売家と唐様で書く三代目）という古川柳を知らぬ訳ではない。

令和六年五月十四日には、コロナ禍等により一年遅れで、

創刊一〇〇周年記念祝賀会を「香蘭」にゆかりのある歌人を

II、「香蘭」の現況

歌誌「香蘭」を毎月定期に発刊。特筆すべきは、結社内の先頭集団として、内外に開かれた「明宝研究会」を毎月開催していることである。会員及び外部の希望者も参加自由、ただし会員は研究発表の義務を負う。この七月で一五四回を数える。

本誌の作品欄は作品一、二、三のほか「香蘭集」があり、各欄毎に所定数の作品を掲載する。掲載作品はすべて選者の選を経てのもの。現在の選者は千々和久幸、丸山三枝子、桜井京子、渡辺礼比子、高畠憲子の五名である。

III、入会希望者へ

入会は自由（資格要件は問わない）かつ隨時、問い合わせは編集部あるいは選者宛。詳細は「香蘭」のホームページに詳しい。

23 香蘭 2024年11月号

「香蘭」とともに（13）

——連載から学んだこと——

鈴木 桂子

いうことはならなかつた。ただの「失敗談」の方がまだ救いはあつたかもしれない。ではなぜ、私の書いた文章は、ただの「自慢話」になつてしまつたのだろうか。

過度な自分語りは読者にとつてはノイズ。

・著名人は別として、書き手がただの普通人でしかない場合、自分語りなど求められないし、それが過ぎれば、何だコイツ、と思われるのがオチである。

・そして、書きたいことが最終的に何なのか分からぬまま書き継いでも、結局は分からぬ文章に終わるしかないということ。

私の環境が、當時どのようにして「文学」と繋がり、戦後民主主義という時代に翻弄されながら、何を得、何を失つていったのか書いてみたかったのだが、時々に話題が錯綜して本題に至ることができなかつた。再考が必要である。拙文をお読みいただいた方々に感謝し、非力をお詫びして、今回を区切りにひとまず稿を閉じることに。

ところで今回氣付いたことだが、私は短歌を始めて以来ずっと、歌を作るのは生涯学習の一環として、老いの楽しみと捉えて來た。不遜にも短歌にそれ以上のことは望まなかつた。短歌という詩型に、他の「文学」のように多くを望めないと思つていたからである。

短歌を始めた時、短歌を作つてみて初めてその難しさを知つた。同じように、「香蘭」誌に文章を書く機会をいただき、書いてみて初めて書くことの難しさを知ることになった。何を書くというあてもなく始めたため、何を書いていいのか分からず、毎回のよう書き泥んだ。あげく切羽詰まって、個人的な体験から書き始めるという、安易な方法をとらざるを得なくなつた。

「体験談」は、私の環境が期せずして、「文学」に繋がっていく序章になるはずだったのだが、無自覚なままに書き継いだため、「体験談」つまり「自分語り」が一人歩きを始めて、結果、全体がただの「自慢話」めいたものになつてしまつた感がある。「自慢話」でも読ませる文章力があれば、面白く読めるものにすることはできたであろう。「失敗談」も書き方次第では、面白い「自慢話」になり得ることもあるのだから。しかし、私の文章は、そう

た。短歌という詩型に、他の「文学」のように多くを望めないと思つていたからである。しかし、短歌がそれだけではないことを最近考えるようになった。どういう形であれ、私達が現実と出会いう時、現実と理想の間で、人間性はスポイルされていかざるを得ない。競争を強いられる。意に反して勝たなければ明日はない。人間性を犠牲にしても現実を選択せねばならない。現実という巨大な力の前で、人間性を、自分を見失うことなく生きていくのは大変なことである。そして老いて今、老いをどう生きるか。貧困、虐待、フェーケ、分断、戦争、災害、老病死……。価値の多様化、多極化する世界で、私達は今、最終章を生きようとしている。この先、自分の人生と戦い続け、創造的に生きるために短歌があることに私も気付いたのである。人生二〇〇年時代にこそ、短歌は生きる力となろう。

一日の終わりに短歌とともに、「私」を取りもどしている「私」がいることに気付く。私の中で、(短歌)が(文学)へ一步近付いた証であろう。仕事から帰宅して、夜毎食べるコンビニ弁当は、相変わらず淋しいままだが。

(了)

続・酔風船（11）

千々和 久幸

インテリゲンチアということ

24年8月3日（土）に開催された第155回明宝研究会「加藤英彦作品研究」は、桜井京子+石井雅子の対談というユニークな試みだった。その白熱したやり取りは報告書に譲るが、今回の試みには序章がある。「香蘭」2023年（令和5年）9月号の編集後記に招待作品の意義について、わたしは次のように書いた。

：寄稿者は詠いっぱなし、「香蘭」会員は読みっぱなしではなく、適宜に交流し相互の作歌力、読解力を高め合おうという新たなアイデアである、と。

つまり今回の研究会はその相互交流の第一弾であり、その意味では「終わりなきデス・マッチ」の記念すべき幕開けを意味していた。何しろ作者ご本人を前にしての議論だったが、桜井+石井の両発表者は「位負け」をすることなく、率直かつ爽やかな批評だった。

作者の加藤クンは、今日現在も現代短歌の最前線に立ち、現代短歌を先導する歌人の一人である。さらに付け加えるならば、加藤クンの立ち位置は歌人である前に真っ当な一市民であり、知識・識見とともに秀でたインテリゲンチアである、ということだ。

インテリゲンチアとは社会に対して真摯に生きる自覚を持った市民というほどの意味であり、歌人はインテリゲンチアでありた

い、というのがわたしの意見である。

歌詠みだから普段の生き方に多少の逸脱があつても許される、といった古い時代の甘えは自制しなければならない。一生活者としてまた一社会人として、健全な常識人であつて欲しいと思う。ホンモノの詩はそうした健康な頭脳から生まれる。わたしは司会者として加藤英彦クンの今回の対象になつた五十首について、以下のような頼まれざる前口上を述べたのだった。

今回対象となつた五十首をわたしは長編叙事詩「母と在る日に」のプロローグとして読みました。母を介護する日常身辺に生起する事実、事柄を凝視し、それを社会的視野の中で捉え、詩の高みに結晶した作品群である、と。同時に左側の頁にもゼひご注目願いたい。

こちら側は短い随想ですが、このエッセイがなかなかの名文であります。ある月はそれが作品の解題の役割を果たしており、作品の背景を理解するにはこれほど貴重は資料はございません。わずかに一頁ですが、これだけを読んだだけでも加藤クンがエッセイの名手だという事が解る、と。

最後に記憶に残つた作品を挙げておこう。

・草むらに仔猫がそつと吐き出だすものありかたちのなき闇ひとつ

「鴉」

・日ごと濃くなる諂妄に炎えあがるウクライナもガザも覗えてはお

「空の鍵盤」

前者が抱えている間は人間誰もが抱えている間であり、後者の諂妄には母の幻視と戦争が二重映しになつて印象深い。